

佳作

「創造する・挑戦する」

―夢の扉の向こうへ―

東京都立日比谷高等学校2年

満 処 絵里香

「こんにちは」笑顔で交わす彼女との挨拶。「外は晴れて来たよ！」と私は彼女に伝えた。彼女は私を見詰め、微笑んだまま首を傾げる。しかしポンと手を打ち、笑いながら両手の掌を私に向け、自身の顔の前へ運び交差させた。そして、その両手を左右に開いた。自らの誤りに気付いた私は、慌てふためき「ごめんね」と口にしながら、右手を動かし頭を下げた。それでも彼女の笑いは止むことは無く、私も釣られて吹き出した。そう、私達の会話には、手の動作が必要不可欠。先程、彼女を笑いの渦に巻き込んでしまった原因は、私の手話の表現が、伝えたい事柄と全く異なってしまったからだ。雨が上がったことを伝えたくもっていたが、両手を逆方向に動かしてしまった。その私の動作だと手話の表現方法で、暗いや夜を示し「こんばんは」との意味でもあった。明るく晴れた昼下りに、暗いよ今晩はと嬉しそうに挨拶されたら、彼女で無くても笑い転げるであろう。自身の滑稽な姿を彼女と

共に大笑いした私だが、彼女に出逢う以前の私だったなら、絶対に失敗を笑いで受け取められなかった。恥じる感情に押し潰され意気消沈していたに違いない。そんな私に彼女は、新たな自分へと一歩踏み出す勇気をくれた。

彼女との出逢いは今年の春。桜が眩しい季節だった。私がボランテアで伺わせて頂いている福祉施設の中庭で、枝から舞い散る花びらを夢中でキャッチしている女の子がいた。その身の熟しは圧倒される程に敏速で、私は只々見惚れていた。釘付けの私と花びらを追い掛ける彼女との二人だけのその空間は、とても静かで靴音だけが心地好く響いていた。私は「桜、綺麗ね」と声を掛けた。が、彼女は私の存在に気付かなかった。もう一度声を投げ掛けたが私の声は届かなかった。そして、彼女が音の無い世界に居ることを知った。私は携帯電話に文字を打ち、彼女の肩を叩いた。少し驚きながらも文字を読んだ彼女は、両手をゆっくり動かし「きれい」と答えてくれた。それが中学生に成ったばかりの彼女との最初の出逢いであり、私が初めて手話に触れた時であった。それから私達は文字を通じて語る筆談を用いて、日々交流を深めた。お互いの思いを伝えることが出来る筆談に喜びを噛み締めながら、充実した時間を共に過ごした。そんなある日、何時もの様にお互い伝えたい出来事をボードに書き、筆談に夢中になっていた。楽しい内容に二人はお腹を抱え笑っていた

その時、彼女はペンを置き素早く両手を動かし始めた。本当に無意識に彼女は手話を用いて話していたのだ。そして直ぐ様私に気付き、その手を止めた。彼女は即座にペンを掴み文字を通じて私に謝った。違う、謝るのは私の方だと心が震えていた。何故私は気付けなかったのだろう。彼女が手話を使わずに接してくれていた優しさに。筆談で何事も全て分かり合えていると思いがついていた自分がとても愚かで哀しみに覆われた。そして、私は持っていたペンを置いた。自分の右手に思いの丈を込め、彼女に向かい手を動かし、全身全霊で謝った。私のたどたどしい手話が彼女に届き、彼女は首を大きく横に振った。その姿を目の当たりにし、私が今挑むべきことは何かを悟った。手話が自らの言語の一部と成る様、修得を心の糧とし挑戦へと決意した。

揺るぎ無い志と共に手話修得への道の扉を開けた私であったが、自分の安易さを直ぐ様身に沁みることとなる。言葉と同時に表現される手の動作は角度や位置が大変重要であり、ダンス等の振り付けの様な習得法とは異なると、学び始めてから実感した。暗記で何とか成るなどと高を括っていたのかも知れない。私は自らが開けた扉を閉めたくなる衝動に駆られそうになっていた。そんな思いを抱える中彼女に会うと、途端に私の不安を察知した。彼女に元気が無いと問われた私は、覚えたての手話を精一杯の知識から引き出し両手を動か

したが、やはり伝わらなかった。もどかしさと情け無さ、何より今自分が言いたいことが手話では伝えられないという現実を突き付けられた。努力が報われない失望感と言うより、失敗する惨めな姿をこれ以上見せたく無いと心から感じていた。私の落ち込み、塞ぎ込む姿をじっと見ていた彼女だったが、次の瞬間「ガンバレ」と声を発した。私は一瞬耳を疑い、俯いていた顔を瞬時に上げた。そこには毅然として立ち向かう彼女の姿があった。渾身の力を込めたのである。顔は耳まで赤く染まっていた。しかしその清々しく凜とした姿を以て、羞恥心など解き放し、失敗こそ欠点を改められるチャンスなのだと私に示してくれたのだ。「大丈夫？」彼女の手の動きで気付いた。私の頬を止め処なく流れる涙を。

私の挑戦はまだ扉を叩き開けただけ。扉の向こう側へ続く道の先で、志を成し遂げた自分に出会えるのか、今は遙か遠くて見えない。けれど、夢は決して諦めない強い意志と共に挑み続けたい。彼女が届けてくれた大切な宝物を胸に抱き、未来へ向かって歩いて行こう。